III. ギリシアの歴史家——運命への愛 1

III-1 古代人の歴史像——言葉と出来事をつなぐ

言葉と出来事、出来事と出来事を繋げるものが、因果律だった。こうした因果律についての考え方は、古代から近代に至るまで、同じだったのだろうか。

→ カントにおいて、現象の世界の因果連鎖はニュートンのような確実な必然性をもたらしうるものだった。またマルクス主義においては、歴史の因果律は、生産力などの経済概念によって、より科学的に跡づけられたものだった。

→ 近代科学において、出来事と出来事とのつながりは、科学的な因果律（原因）をたどることで得られる。それは学者のいる現在から過去にむかってなされる、単線的（リニア）な、反省的なもの。（歴史は振り返ることによって得られる。）

III-2 文芸の女神、神話から歴史へ

○ 九人のムーサたち

ゼウスと記憶の女神ムネーモシュネーの娘たち。パルナッソス山にあって学問の神ポイボス・アポローンに仕える。ヘシオドスの『神統記』などにその名が伝えられている。ヘシオドスは冒頭でムーサに次のように語らせている。

> **ヘリコン山のムウサたちの讃歌から謳いはじめよう　…彼女たちなのだ　このわたしヘシオドス／以前聖いヘリコン山の麓で　羊らの世話をしていた　このわたしに　麗しい歌を教えたもうたのは。／まずはじめに　このわたしに語りたもうたのだ　つぎの言葉を／神楯もつゼウスの娘　オリュンポスのムウサたちは。／「野山に暮らす羊飼いたちよ　卑しく哀れなものたちよ　喰いの腹しかもたぬ者らよ／私たちは　たくさんの真実に似た虚偽を話すことができます　けれども　私たちは　その気になれば　真実を宣べることもできるのです」**
>
> ヘシオドス『神統記』廣川洋一訳、岩波文庫

カリオペー（叙事詩）／クレイオー（歴史）／エウテルペー（叙情詩）／タレイア（喜劇）／メルポメネー（悲劇）／テルプシコラー（舞踏）／エラトー（独唱歌）／ポリュムニアー（讃歌）／ウーラニアー（天文）

→ 歴史と詩とが混在。近代人が暗黙のうちに分割している記憶力（過去に向けられて事実を引き出す能力に相当）と想像力（未来に向けられて虚構を作り出す能力に相当）の境界がない。真実と真実らしくみえるものとのあいだの緊張関係。今日の学問が記憶力に極端に傾斜していることを思えば、古典古代の学問のあり方が根本的に異なっていたと考えざるをえない。

Cf. アリストテレス（前 384〜前 322）『詩学』第九章

> **歴史家と詩人は、韻文で語るか否かという点に差異があるのではなくて——じじつ、ヘロドトスの作品は韻文にすることができるが、しかし韻律の有無にかかわらず、歴史であることにいささかの変わりもない——、歴史家はすでに起こったことを語り、詩人は起こる可能性のあることを語るという点に差異があるからである。**

○ 神話（神々の文学）・物語（英雄の文学）・歴史（民衆の文学）

ヘシオドス『仕事と日々』のなかの時代区分：クロノスやゼウスによって統治される金の種族、銀の種族が生きていた「神々の時代」。その後、英雄（半神）時代が訪れ、青銅の種族が生きる「青銅の時代」となり、そして現代の人間が生きる「鉄の時代」となる。神々の時代にあって、言葉は《神話》をなした。英雄の時代にあって、言葉は《物語》をなし、青銅と鉄の種族が生きた「民衆の時代」には、言葉は《歴史》をなしただろう。

→ 神話＝虚構と歴史＝事実とが複雑に入り交じった不思議な文学史

→ 事実と嘘という二項対立ではなく、象徴性（神話）・隠喩性（物語）・具体性（歴史）という、抽象から具体に到る、性質の異なる三つのタイプの事実を考えるべきではないか。

← 歴史は事実をより正確に反映した記述によってのみ評価されるべきか？

III-3 ホメーロス（前８世紀頃）『イーリアス』

イタリアの歴史家ジャンバッティスタ・ヴィーコによって、英雄時代最後の詩人と呼ばれる。彼の名のもとに伝わる『イーリアス』の成立年代は前 750 年頃か。紀元前 1200 年頃に行なわれたギリシア人たちの小アジアはイーリオスへの 10 年に渡る遠征、いわゆるトロイア戦争を描いた叙事詩。前 6 世紀後半、アテナイで文字化。**「怒りを歌え、女神（ムーサ）よ、ペレウスの子アキレウスの――アカイア勢に数知れぬ苦難をもたらし、あまた勇士らの猛き魂を冥府の王（アイデス）に投げ与え、その亡骸は群がる野犬野鳥の啖（くら）うにまかせたかの呪うべき怒りを」**の言葉で始まる全 24 歌で構成される。

（叙事詩：一つの長音節と二つの短音節（長・短・短）あるいは二つの長音節（長・長）の組み合わせを基本として、これを５回反復したあと、長・短もしくは長・長を加えて一行とする韻律をもつ（つまり６の韻脚をもち、一番多くて１７音節）。ダクテュロス（長短短）あるいはスポンデイオス（長長）・ヘクサメトロス（六歩格）といわれる。）

→ 神話世界を描いたとされることが多かったが、ハインリヒ・シュリーマンによって 1873 年に発掘されたヒサルルクの丘の遺跡や遺物から、歴史的事実として注目されるようになる。散文で書かれた、ペルシア戦争を描いたヘロドトス、ペロポネソス戦争を描いたトゥキュディデスに匹敵する歴史叙述として、トロイア戦争を謳う叙事詩『イーリアス』をあえて捉えてみる。

→ 同時代史として描かれたヘロドトスやトゥキュディデスと異なり、ホメーロスは 400 年前の事績を描いたことになる。

→ トロイアの王子パリス（アレクサンドロス）が美を競うヘーラー、アテーナー、アプロディーテーの三人の女神を審判するシーンもなければ、パリスがギリシア側の大将アガメムノーンの弟メネラーオスの妻、絶世の美女ヘレネーを奪うシーンもない。アキレウスがパリスの矢によって《アキレス腱》を射たれて死ぬシーンもなければ、オデュッセウスの狡知により「木馬」の奸計でトロイアが滅亡するシーンもない。すなわち、この叙事詩は、「物語」という概念が本来もっているべき始まりと結末とが欠けている。ホメーロスは１０年間の戦争のうち最後の一年、最後の一年のうち結末を含まぬ 51 日間にわたる、アキレウスの怒りだけを描いた。

○ <u>英雄たちを翻弄する《神々の言葉》</u>

【アカイア方の将ディオメデスの槍がトロイア方の守護女神アプロディーテーの腕に達する】第 5 歌

→ 戦の槍が美を傷つける。文学者ホメーロスによる既存の美への果敢な宣戦布告ととることも、戦争批判ととることもできる。また人間と神の近しさの表現。

【アキレウスのために、ヘーパイストスは武具を造る】第 18 歌

【名馬クサントスの予言】第 19 歌

【トロイアの英雄ヘクトールの逃亡】第 22 歌

→ きわめて不思議なシーン。城壁を三周しながら、ヘクトールは弟の幻影をみて勇気百倍、アキレウスに立ち向かう。だが弟は、アキレウスに協力するアテナの見せた幻影である。

【ヘクトールの遺骸を幾昼夜にもわたって戦車にくくり付けて引き摺り回すアキレウス】第 24 歌

【ヘクトールの父、プリアモス王とアキレウスの対面】第 24 歌

- 歴史学者としてこの叙事詩の主題を探るなら、神から授けられた《運命》に抗いながら、その強烈な抵抗がかえって彼らをして運命のなかに引きずり込んでいくような、いいかれば歴史のなかに飲み込まれていく英雄たちの姿が描かれているように思われる。《英雄時代》の最後の、そして《民衆の時代》の最初の歴史＝物語。

→ アキレウスやヘクトール、アガメムノーンやプリアモス王は本当に存在していたのだろうか？　その存在感からして、3000 年以上前の人物をここまで克明に描いた文学は世界に存在しない。

【史料】

ホメーロス『イリアス』（松平千秋訳、岩波文庫）

【アカイア方の将ディオメデスの槍がトロイア方の守護女神アプロディーテーの腕に達する】第５歌

アイネイアスは、アカイア勢に戦友の亡骸を運び去らせてはならぬと、楯と長槍とを手に戦車から跳び降りた。勇気凛々として獅子の如く亡骸のまわりを歩き、均斉とれた丸楯と槍とで屍をかばいつつ、立ち向かってくる者があれば討ち取ろうと、凄まじい叫びをあげて身構えた。この時テュデウスの子（ディオメデス）は石をとりあげた――なんたる怪力か、今時の人間ならば二人がかりでも持ち上げ得まいと思われるほどの大石であったが、彼は独りで軽々と振り廻し、アイネイアスの腰のあたり――太腿が腰の番いにはまり込むところ、世にいう「盃骨（さかずきぼね）」――に撃ち当てた。骨は砕け、二本の腱も切れて、ささくれた石で皮膚も剥がれる。勇士は倒れて膝をつき、逞しい手で辛くも地上に身を支えたが、その両目を黒い闇が蔽った。

この時、アイネイアスの生みの母、その昔、牛を飼うアンキセスの腕に抱かれて、彼を妊（みごも）った、ゼウスの姫アプロディテが、目敏くもこの有様に気づかねば、一軍の将アイネイアスもここに最期を遂げたであろう。女神は白い両の腕をわが子にまわし、また、駿馬を駆るダナオイ勢の何者かが、わが子の胸に青銅の槍を投げ、命を奪ってはならじと、飛来する矢や槍の防ぎにと、襞のある美しい衣を、わが子の上に被せてやった。

…さてそのディオメデスは、仮借なき槍をかざしてキュプリス（アプロディテ）に迫るところであったが、めざす相手は力の弱い女神で、男の子らの戦いに立ち交って采配をふるう、アテネあるいは都城を屠るエニュオの如き女神ではないと見抜いていた。群がる軍兵の間を追って遂に追いつくと、豪毅の勇士テュデウスの子は、身を伸ばして躍りかかり、鋭い槍で柔肌の腕の先を突いた。たちまち槍は、優雅（カリ）の女神（テス）たちがみずから仕立てた、この世ならぬ神の衣を貫いて、掌の付け根辺りの膚を切り裂き、神の不死なる血が流れ出た――その血とはすなわち至福なる神々の体内をめぐる霊血（イーコール）のこと、神々は穀物の類いを口にせず、きらめく酒を呑むこともない。さればこそ神々には並みの血は流れておらず、不死なるもの（アタナトイ）と呼ばれもする。

【アキレウスのために、ヘーパイストスは武具を造る】第18歌

最初に大きく頑丈な楯を、全面に精巧な細工を施して作った。まわりには輝きわたる見事な三重の厚さの縁をめぐらし、これから銀の提げ紐を垂らす。楯の本体は五重の造りで、意匠を凝らした装飾が施してある。

そこには大地あり天空あり海がある。疲れを知らぬ陽があり、満ちゆく月、また天空を彩る星座がすべて描かれている――すばるに雨星、さらに力強いオリオン、また「熊」座、これは別の名を「車」座ともいい、同じ場所を廻りオリオンをじっと窺っている。この星のみはオケアノスの流れに浸かることがない。

つづいて人間の住む美しい二つの町を造った。一つの町では婚礼と祝宴の情景が写され、人々は花嫁を実家から婚家へと、燃え輝く松明をかざしながら町の中を送ってゆき、婚礼を祝う歌声が高らかに響く。こちらでは若い男たちが踊りながらくるくると廻り、その間で笛や竪琴が鳴り続け、女たちは戸口に出ていずれも感に耐えた面持でそれを見物する。またほかの場所では…

もう一つの町では、武具をきらめかせた二つの軍勢が、その周りを囲んでいる。攻める側が良しとした案は二つ、一つは町を攻略すること、他の一つは、この美わしい町が内に蔵する財宝をすべて折半し（敵味方で）頒つことであったが、町の方では敵の意に従う気はさらさらなく、伏勢をもって…

次に神が楯の表に鋳出したのは、三たび鋤いて柔らかく肥沃になった広い休耕田、ここには多数の農夫が、番いの牛をこなたへかなたへとぐるぐる曳き廻す。牛を返して田の端に行き着くたびに、密の如く甘い酒の盃を手にした男がそれを迎えて、盃を手渡す。農夫らは再び土深い畑の端に行き着こうと必死になって…

次には王領の荘園を写して見せた。ここでは傭いの人足たちが、鋭い鎌を手に麦を刈っている。刈られた麦の穂の束が、刈り跡に一列になって地面に落ちてゆくところもあれば、束ね役の者がそれを縄でくくっているところもある。束ね役の者は三人その場にいるが、その後ろには子どもたちが落ちた穂を拾い集め、腕に抱えてはせっせと束ね役に渡している。人足たちに混じって王笏を手にし

た王が、満足げな面持で黙然として畦の端に立っている。離れた樫の木陰では…

楯の表にはまた、葡萄の実がたわわに稔る葡萄園を描いた――黄金造りで美しく、連なる房はみな黒く、蔓は畑の端から端まで銀の支柱で仕立ててある。両側の溝は群青の…

次には、真直ぐに角の立つ牛の群を描いた。牛は黄金と錫で造られ、啼きながら小屋を出て、さらさらと音を立てて流れる河に沿い、風にそよぐ蘆の茂みに沿って牧場へ…

ついで名立たる足萎えの神は、美しい谷間の平地に雪白の羊の草食む広い牧場を…

次に名立たる足萎えの神は、その昔ダイダロスが、髪美わしいアリアドネのために、広大なクノソスの町に設けたものに類うべき踊り場を見事に仕上げた。そこには若者や、嫁にと引く手もあまたの娘たちが…

そして神は、頑丈に仕上げられた楯の一番端の縁には、滔々と流れる大河、オケアノスを描いた。

【名馬クサントスの予言】第 19 歌

「剛勇アキレウスよ、いかにもわれらはこのたびはまだあなたの身をお守りしましょう、ですがあなたの最期の日は間近に迫っているのです。それもわれらのせいではなく、偉大なる神と強力な運命(モイラ)の女神(イ)のなさること、それにまた、トロイエ勢がパトロクロスの肩から武具を剥いだのも、われらの動きが鈍かったためでも怠慢のせいでもなく、髪美わしいレトのお産みなされた、神々の中でも特に優れた神が前線で討ち取り、ヘクトルに功名をたてさせられたのです。われらは最も脚の速いといわれる西風(ゼピュロス)とでも速さを競うことができるつもり。つまり、さる神とさる勇士との手にかかって最期を遂げるのは、あなた御自身に定められた運命なのです。」

…

「クサントスよ、どうしてわたしに死を予言したりする。要らざることだ。わたしが父母から離れたこの地で果てる運命にあることは、自分でよく承知している。とはいえ、トロイエ勢に嫌というほど戦いの苦汁を味わわせるまでは、わたしはやめぬぞ。」

【トロイアの英雄ヘクトールの逃亡】第 22 歌

このように仔鹿の如く脅えて逃れ帰ったトロイエ勢は、町の到る所で堅固な胸壁にもたれながら、汗をおさめ、飲物をとって渇を癒した。一方アカイエ勢は、楯を斜めに肩に掛けて城壁に迫って来る。死の運命はヘクトルを金縛りにして、イリオス城のスカイア門の前に、そのまま留まらせた。

…収穫時に現われる星の如く、輝きながら走って来るアキレウスを最初に認めたのは老王プリアモス、…アキレウスと戦おうと気負って城門の前に立つ己の息子に大声で呼びかけて懇願する。老王は両手を差し伸べて憐れな声でいうには、「ヘクトルよ、大切な倅よ、頼むから味方もなくなった一人で、あの男を待ち受けるのはやめてくれ…

老王はこういうと、灰色の髪を掻き上げ、毛を毟りとったが、ヘクトルの心を説き伏せるには至らなかった。今度は別のところから母親が涙を流して嘆きつつ、胸をはだけもう一つの手で乳房を示して、涙ながらに翼ある言葉をかけていうには、「ヘクトルよ、わが子よ、むかしわたしが悲しみを忘れさせようと、乳房をそなたの口にあてがってあげたことがあったのなら、さあこの乳房をおろそかには思わず、それとともにこの母をも憐れんでおくれ。そういうことを思い出して、大切な倅よ、あの敵を防ぐのは城壁の中からするようにしておくれ、決して前に出て立ち向かってはならぬ。あれは恐ろしく非情な男…

…このように二人は涙を流しながら、わが子に切々と訴えて語りかけたが、ヘクトルの心を動かすことはできず、彼はアキレウスの巨躯が迫って来るのを待ち受ける。そのさまは、山に棲む大蛇がその巣の中で人を待ち受けるよう、毒草を食んで狂暴の気が体内に浸み込み、穴の中でとぐろを巻いて凄まじい目付きで睨んでいるよう。そのようにヘクトルは不屈の勇気を保ち、突き出た櫓に輝く楯を立て掛けたまま退こうとはせぬ。

…アキレウスは、飾り毛の揺れる兜を戴く戦士、軍神エニュアリオス（アレス）にさも似た姿で、右肩の上に見るも恐ろしいペリ

オン山のとねりこの槍を振り廻しながら近づいて来た。青銅の武具は、燃える火か昇る日輪の光の如く、辺りに照りわたる。それを見るやヘクトルは震えにとりつかれ、もはやその場に留まる勇気も消え失せ、背後にある門を離れて逃げにかかれば、ペレウスの子は駿足を恃んで襲いかかったがそのさまは、山中、鳥の中でも最も敏捷な鷹が、気弱な鳩を身も軽々と追うかのよう、鳩はその前を逃れてゆくが、こちらは鋭い啼き声をあげて幾度も近くから襲いかかり、なんとしても捕えんと逸り立つ。そのようにアキレウスは気合鋭く一直線に襲いかかると、ヘクトルはトロイエの城壁の蔭に逃れて、激しく膝を動かして走る。…そのように二人は快足を飛ばしてプリアモスの町のまわりを三たび廻った。

【ヘクトールの遺骸を幾昼夜にもわたって戦車にくくり付けて引き摺り回すアキレウス】第 24 歌

ひとりアキレウスのみは愛する戦友のことが忘れがたく泣くばかりで、なにものをも屈服させずにはおかぬ眠りをも彼を捕えることができず、転々と寝返りを打ちながら、パトロクロスの雄々しい立居振舞い、その逞しい力を偲び、さらにはまた彼とともに耐えた苦難の数々、また敵勢との戦いや、荒波を越えて海を渡ったことなど、さまざまに思い起こしながら、ある時は脇腹を下に、ある時は仰向けに、またある時は俯伏しては、大粒の涙をこぼす。さてはまた、すっくと起き上がると、浜の渚を気の抜けたようにさまよい歩く。とはいえ、海の浜辺に曙の光が射すのを見逃すことはなく、（夜明けとともに）戦車に駿足の馬を繋ぐと、ヘクトルを引き摺るべく車の後ろに結びつけ、今は亡きメノイティオスの息子の墓のまわりを、三たび引き摺ってから、陣屋へ帰っては休むが、ヘクトルの遺体は砂塵の中に俯伏して横たわるのを、そのまま放っておく。

【ヘクトールの父、プリアモス王とアキレウスの対面】第 24 歌

アキレウスは神に見まごうプリアモスの姿を見て仰天した。…アキレウスは老王の手を取り、静かに押しやって、わが身から離れさせた。こうして二人はそれぞれの思いを胸に、こちらはアキレウスの足下に腹這いになって、勇猛ヘクトルのためにさめざめと泣き、アキレウスはわが父を、またパトロクロスをと代わる代わるに偲んでは泣いて、二人の泣き声は陣屋中に響きわたった。勇将アキレウスはやがて心ゆくばかり泣き、気持ちからも体からも悲嘆の情が消え去ると、つと椅子から立ち上がり、老王の白くなった頭と髯とを憐れみつつ、その手を取って起こしてやり、翼ある言葉をかけていうには、「なんと気の毒な、あなたもその心中にさまざまな不幸を忍んでこられたのだな。それにしてもよくもまあ思い切って、単身アカイア勢の船に足を運び、多数の優れた御子息を殺めた男の目の前に出てこられたものだ。あなたの心は鉄のようだな。まあ椅子にお掛けになるがよい。苦しいことごとは、辛いことではあるが、胸の内にそっと寝かせておきましょう。心を凍らす悲しみに暮れたとて、どうにもなるものではない。そのように神々は哀れな人間どもに、苦しみつつ生きるように運命の糸を紡がれたのだ——御自身にはなんの憂いもないくせに。…神々は父ペレウスにも、生れながらにしてくさぐさの見事な贈物を下された。仕合せということでも富でも万人に優り、ミュルミドネス人の王となり、しかも人間の身である彼に、女神が妻に与えられた。しかしそういう父にも、神は善からぬことを一つ下された——父には家に王位を継ぐべき子が生れず、儲けたたった一人の息子は時ならず世を去る運命にある。

IV. ギリシアの歴史家——運命への愛２

IV-1 ヘロドトス（前 484 年頃〜前 430 年頃）『歴史』

ハリカルナッソス島出身、僭主政治に反対しリュグダミスを追放後、市民の妬みを恐れてサモス島に亡命。ペルシア・エジプトを旅したのち、アテナイに滞在、前 444 年に南イタリアのトゥリオイに移住。そこで死去（アテナイで逝去の説もある）。ペルシア戦争（前 490、前 480〜479）の顛末を描いた『歴史』により、「歴史の父」と呼ばれる。

Cf. J. B. Bury, "The Ancient Greek Historians", 1909

かれは事件を年代順に記録した最初の人々ではないが、批判を適用した最初の人々である。そしてこのことは、かれらにおいて歴史が始まったことを意味する。〔＊初期の歴史家といえる人物に、前６世紀半ばのヘカタイオスがいる。〕

→ 近代的価値観からみた歴史とは、たんに年代順に出来事を記録することではない。記述者の評価／批評／批判を伴うもの。文書記録官（官僚・博学的）／古物蒐集家（在野・博学的）⇔歴史家（批判的）

But: **私にとって、本書を通じての原則は、各人によって語られたことを聞いたままに記すということである。**

ヘロドトス『歴史』2,123

○ ペルシア戦争の「原因」と探究（ヒストリエー）

本書は、ハリカルナッソスの人ヘロドトスが、人間界の出来事が時の移ろうとともに忘れ去られ、ギリシア人やバルバロイの示した偉大で驚嘆すべき事績の数々——とりわけ両者がいかなる原因から戦いを交えるに至ったのか——も、やがて世の人に語られなくなるのを恐れて、みずから研究調査（ヒストリエー）したところを書き記したものである。同『歴史』1,1（序文）

→ 第１巻をクレイオーの巻として、ムーサの数と同じ全９巻で構成されるうち、実際のペルシア戦争は第６巻から第９巻まで。第６巻半ばまでは、トロイア戦争からアケメネス朝皇帝ダレイオスによる周辺諸国制圧に至る歴史が、さまざまな伝奇的エピソードを交えながら語られている。

→ ペルシア戦争の原因のひとつにあげられているのが、７００年前のトロイア戦争。**「イリオスの攻略が原因となって、彼ら（ペルシア人）のギリシア人に対する敵意が生じた」**（同 1-5）。

Cf. トロイア戦争の異説も伝える（2,118-120）。エジプトの祭司によると、ヘレネは当時エジプト王プロテウスの許にいて、トロイアはギリシア方に返還すべき美女も財宝もないと主張していた。ギリシア方はトロイアを滅ぼしたあとで、はじめてそれが事実であったと知り、メネラオスはエジプトに彼女を迎えにいったという。

→ しかし彼がその原因の一番にあげるのは、クロイソス王を介したペルシアとギリシアとの邂逅である。

○ 人間を導く《夢》、《神託》、《予言》

【リュディア王クロイソスとソロンの対話、運命について】1,30-32

→ すべては「偶然」。歴史の必然を強烈に批判するソロンの言葉が歴史の冒頭に置かれることの意味。またこの言葉に、神託への依存が強いクロイソスは、自らの王国滅亡の時まで、苛まれることになる。

【ペルシア皇帝キュロスの勢力が拡大するに及び、クロイソスはそれを打倒すべく、神託をうかがう】1,46-56

【クロイソスの《運命》】1,85-86

→ クロイソスは、キュロスによって処刑される直前、ソロンの名を三度叫ぶ。彼の足下で燃える火が雨によって消え、彼はキュロスの下僕となる。

【ギリシア遠征に反対したアルタバノスとギリシア遠征を中止しようとしたクセルクセスがみた夢】7,12-19

【クセルクセスの攻撃に晒されるアテナイの運命、デルポイの神託】7,140-141
【サラミスの戦いにあたって、バキスの神託】8,77
【ペルシア敗北、遷都を進める言葉に対するキュロスの古い忠告が事実となる】9,122

- 妖しげな伝承を語るに臆さないヘロドトスは、古典時代から「嘘吐き（プセウステース）」といわれていた。しかし、歴史学者が古い歴史学者の論駁に成功するとき、古い歴史はすべて嘘になっていくなら、いったい歴史学者が真実を語るということはありうるのだろうか？（人間の語る言葉は、まったくの嘘であることも、まったくの事実であることもできない）
  - → 夢、神託、予言が要所要所に配置され、それらが出来事と出来事、点と点とを繋げる線になる。これらの怪しげな、神懸かりの言葉が、偶然のうちに運命の糸となって、真実の出来事となっていく。
  - → 現在から過去を見渡す近代の反省的な因果律の探究とは異なる、歴史の探究の仕方。過去に偶然に語られた言葉が、不思議な運命のなかで現在に実現し、歴史を描くという、そうした歴史叙述。
  - → 運命（モイラ）の糸に抵抗し、ときに乗り越えようと努力した英雄時代の《物語》ではなく、いかにして運命の女神の意に寄り添うかという、民衆の時代、青銅と鉄の時代の《歴史》。

IV-2 トゥキュディデス（前 460 年頃～前 400 年頃）『戦史』

アテナイ市民。ペロポネソス戦争（前 432～前 404）中にたびたび軍役を経験。アンフィリポリスの遠征では将軍として軍隊を指揮するも、スパルタに敗北し、20 年間亡命。ペロポネソス戦争のアテナイ敗北（前 404）後にアテナイに帰国後、死去。近代歴史学の父とされるレオポルト・フォン・ランケは、トゥキュディデスを高く評価。

○ 同時代史と正確な事実

アテナイ人トゥキュディデスは、ペロポネソス人とアテナイ人とが互いに争った戦の様相をつづった。筆者は開戦劈頭いらい、この戦乱が史上特筆に値する大事件に展開することを予測して、ただちに記述を始めた。当初、両陣営ともに戦備万端満潮に達して戦闘状態に突入したこと、また残余のギリシア世界もあるいはただちに、あるいは参戦の時機をうかがいながら、敵味方の陣営に分かれていくのを見たこと、この二つが筆者の予測を強めたのである。1,1,1

戦争において起こった事績について、偶々そこに居合わせた人から仕入れた知見を事実として記述することをよしとせず、また自分の主観的類推でこれを記述することもせず、自分が目撃者であった場合も、他の人たちから知見を得た場合も、事柄の一つ一つにできるだけ正確に検討を加えて記述することを重視した。…私の著述には神話伝承が含まれていないため、耳にしても面白くないと思われるかもしれない。1,22,3-4

  - → ギリシア全土に荒廃をもたらしたペロポネソス戦争を全 8 巻に描いた（未完）。ヘロドトス同様の散文で描かれているが、平明なヘロドトスと異なり、大胆な省略によって極度に圧縮された文章のなかに、多くの意味を込めた難解な文体。ヘロドトスの『歴史』のアクセントになっていた夢や神託、予言はほとんど出てこない。アクセントになっているのは、人間が人間に語る《演説》。

○ ペロポネソス戦争の「原因（アイティアイ）」

この大戦は、アテナイ人とペロポネソス人が、エウボイア島攻略ののち両者のあいだに発効した和約を破棄したとき、はじまった。私は、まずこの和約破棄にいたらしめた原因を問い、両者の紛争の記述からはじめ、ギリシア人を襲ったこの大動乱の原因を後日追究する人の労をはぶきたい。というわけは、この事件の真の原因は、一般におこなわれている説明によっては、捕捉されがたい性質

をもつからである。あえて筆者の考えを述べると、アテナイ人の勢力が拡大し、ラケダイモン人に恐怖をあたえたので、やむなくラケダイモン人は開戦にふみきったのである。1,23

→ E・H・カーは「歴史の研究は原因の研究だ」(『歴史とは何か』)と主張。しかし、ヘロドトスやトゥキュディデスの叙述において、「原因」は冒頭でわずかに語られるのみ(近代歴史学において、事件に至る「原因」は、経済(階級闘争)で、軍事力で、権力闘争で説明される。近代的な因果関係を満足させる記述は彼らにはあらわれない)。

○ 人間が人間を導く《演説》

【ペロポネソス戦争での最初の死者を弔うペリクレス】2,35

→ アテナイ民主政治を歴史に称えるペリクレスを市民は熱狂的に支持する

【ペリクレスへの非難に対して、民会での彼の演説】2,60

→ ペロポネソス戦争での初期の敗北と荒廃により、ペリクレスに罰金刑を科す市民。しかし彼の演説によってふたたび市民は彼および戦争の継続を熱狂的に支持するようになる

【ピュロス攻防戦におけるデモステネスの激励】4,10

【大戦の年数を告げる神託】5,26

→ 神託について、トゥキュディデスがあげる数少ない指摘。

【アテナイとメロスの使節の会談】5,84-113

【月蝕により退却の機を失う】7,50

→ 壮大かつ華美を極めたシケリア遠征(前 415〜413)が民会において可決される。弁舌爽やかな美貌の政治家アルキビヤデスの演説により、ニキアスの反対演説は封じられ、民衆はこの遠征を圧倒的多数かつ狂熱的に支持した。しかし遠征直前に起こったヘルメス像損壊事件により彼は失脚後スパルタに亡命。皮肉にも、彼の政敵ニキアスが軍を率いることになるも、勝機を逸して極度の困窮に陥ることになる。

【窮地に陥ったアテナイ】7,55

【シケリアからの退却を前に、将軍ニキアスの激励】7,77

➢ 民主政治を称える清冽な《演説》の言葉。その正義の言葉がアテナイ人(あるいはラケダイモン人)をして自ら泥沼の戦争に追い込む。将軍の激励。勝敗にかかわりなく、兵士は将軍たちのときに説得的な、ときに情に訴えかける言葉に鼓舞されて、死ぬまで戦うのをやめることができない。最後は、民衆の圧倒的な支持を集めた、壮大華美を極めたシケリア遠征において、アテナイは同じ民主政の国家を攻撃するという矛盾を犯して凄絶な敗北を遂げる。美しい理に適った言葉が人間を追い立て、ついには再帰不能になるまで戦いつづける姿が淡々と冷静に描かれている。

IV-3 因果律はひとつか?

英雄たちは神々の定めた運命に抗い(ホメーロス)、夢や神託、予言が不思議に現実を言い当て(ヘロドトス)、人間の演説が人間を運命の渦に巻き込む(トゥキュディデス)。現在(言葉=史料)から過去の事件に向かってなされる一方向的な因果関係の探究ではなく、言葉と出来事とはもっと複雑に絡み合っていて、過去の出来事や言葉は、けっして現在のよってきたる原因を説明するだけではなく、未来を指し示すこともある。近代以後、歴史が科学であろうとしたことによって、こうした古い因果の多様性を失ってしまっていたのだとすれば?

【史料】

ヘロドトス『歴史』（松平千秋訳、岩波文庫）

【リュディア王クロイソスとソロンの対話、運命について】

（クロイソスは七賢人のひとり、アテナイのソロンに世界で一番仕合せな人間は誰かと尋ねた、彼がクロイソスと答えることに期待して。しかしソロンは、庶民の名をあげるばかりでクロイソスの名はついぞ口にしない。）

「アテナイの客人よ、そなたが私をそのような庶民の者どもにも及ばぬとしたところを見ると、そなたは私のこの幸福は何の価値もないと、思われるのか。」

ソロンが答えていうに、

「クロイソス王よ、あなたは私に人間の運命ということについてお訊ねでございますが、私は神と申すものが嫉み深く、人間を困らすことのお好きなのをよく承知いたしております。人間は長い期間の間には、いろいろと見たくないものでも見ねばならず、遭いたくないことにも遭わねばなりません。人間の一生をかりに七十年といたしましょう。七十年を日に直せば、閏月はないものとしても二万五千二百日になります。もし四季の推移を暦に合わせるために、一年おきに一カ月だけ長めるといたしますと、七十年間に三十五カ月の閏月が入ることになり、これを日に直せば千五十日となります。さてこの七十年間の合計二万六千二百五十日の内、一日として全く同じ事が起こるということはございません。さればクロイソス王よ、人間の生涯はすべてこれ偶然なのでございます。…」

【ペルシア皇帝キュロスの勢力が拡大するに及び、クロイソスはそれを打倒すべく、神託をうかがう】

（クロイソスはどの地の神託が正確か、使者を派遣して、使者が発って百日後の自分の行為を言い当てるか試した。多くの神託所のなかで、言い当てたのはデルポイだった。そこで出兵の是非を問うと、ロクシアスの予言として巫女は次のように言った。）

クロイソスがペルシアに出兵すれば、大帝国を亡ぼすことになろうといい、ギリシアの中で最強の国はいずれの国々であるかを調べ、これを同盟国とするよう勧告したのである。クロイソスは使者の復命した宣託を聞くと大いに喜んだ。…クロイソスが自分の王権が永続するかどうかを神に訊ねたのに対し、デルポイの巫女は次のように宣託を下した。

されど騾馬がメディアの王になったらば、

足柔のリュディア人よ、その時は礫も多のヘルモス河に沿うて逃れ止まることなかれ、臆病者の名を恥ずることも要らぬぞよ。

【クロイソスの《運命》】1,85-86

クロイソス自身の運命は次のようであった。クロイソスには…唖の子供が一人あった。今は過去となった彼の全盛時代、クロイソスはこの子のために、出来る限りのことをしてやり、さまざまに心遣いをした中には、この子について神託を伺うため、デルポイに使者を立てたことがあった。すると巫女の答えはこうであった。

リュディアに生まれ、あまたの民の王、世にも愚かなるクロイソスよ、

邸の内に物いう子の待ち焦がれたる声を聞かんと望むなよ。

さようなことにならぬのが、そなたにとっては遥かによいぞよ。

その声をはじめて聞くその日こそ、禍いの日であるぞよ。

城が占領される際、一人のペルシア兵がクロイソスを別人と見誤り、彼を殺そうとして近付いてきた。クロイソスは目前の不幸に心を奪われて、迫ってくる男を見ながら気にとめなかった。また彼にとっては討たれて死んでも、どうということはない気持だったのである。ところが例の唖の子供が、そのペルシア人が迫ってくるのを見ると、恐怖と悲しみの余り声を発して、

「おい、クロイソスを殺してくれるな」

といった。その子供はこの時はじめて口をきいたのであったが、それ以来というものは一生涯ずっと言葉を話した。

こうしてペルシア軍はサルディスを占領し、クロイソス王その人を捕虜にしたのであるが、クロイソスは在位十四年、攻囲をうける

こと十四日間、そして神託通り自分の大帝国に終止符を打ったのである。

【ギリシア遠征に反対したアルタバノスとギリシア遠征を中止しようとしたクセルクセスがみた夢】7,12-19

その夜彼はこんな夢を見たという。眉目秀麗の偉丈夫がクセルクセスの枕もとに立ってこういったのである。

「ペルシア王よ、そなたは兵を集めるとペルシア人たちに公言しておきながら、心変わりしてギリシア遠征を中止するおつもりか。そのような心変わりはそなたのためにもならず、今ここに参った私もそれを許さぬぞ。昨日の昼間計画せられたとおりになされて、ひたすらその満ちを進まれよ」

…夜ふたたび、クセルクセスの夢枕に前夜と同じ姿が現われていうには、

「ダレイオスのお子よ、そなたはペルシア人の面前で公然と遠征の中止を宣言し、私の申したところをあたかもとるに足らぬ者のごとく無視されたな。しかしよく承知しておかれるがよい。もしただちに遠征を行なわぬならば、その結果はかならずこうなる。すなわちそなたが勢威の地位に上ったのも速かったが、こんどはたちまちに顛落の憂き目にあうであろうぞ」

…

アルタバノスは…クセルクセスの衣装を身につけ、王の玉座に坐った後就寝したが、やがて眠りに落ちるとクセルクセスを訪れたと同じ夢の姿が現われ、アルタバノスの枕もとに立ってこういった。

「クセルクセスのギリシア遠征をさも彼の身を案ずるかのごとく装って中止させようとしているのはおまえだな。将来といわず現在といわず、事の必然の流れをそらそうとすればろくなことはないぞ。クセルクセスが私の命に従わぬ場合どのような目にあわねばならぬかは、すでに彼に示しておいてある」

アルタバノスの夢に現われた姿は、このように威嚇すると、赤熱した鉄で彼の両眼を焼きえぐろうとした。

【クセルクセスの攻撃に晒されるアテナイの運命、デルポイの神託】7,140-141

「憐れなる者どもよ、なにゆえにここに坐っておるのじゃ。家屋敷も、輪形の町のそびえ立つ頂きも捨てて、地の涯に逃れよ。頭も胴体も無事にはすまぬ、足のつま先、また手も胴も余すところなく滅びゆくぞ。町は火に焼かれ、シリアの車を駆って進みくるたけだけしき軍の神に踏みにじられる。軍の神の手に滅びゆく累城は数を知らず、ひとりそなたらの城のみではない。またその神により劫火に委ねらるべきあまたの神殿は、すでにいま恐怖に戦いて汗をしたたらせ、その天井からは逃るべくもない災厄を告げる黒い血があふれ落ちている。

さればそなたらはこの社殿を去り、心ゆくまで悲嘆に暮れよ」

…

「パッラス（アテナ）がいかほど言葉を費やし、賢しき才覚を用いて嘆願しようとも、オリュンポスなるゼウスのみ心を動かすことはかなわぬぞ。されどわれはここにふたたびなんじのため鋼にも比すべき硬く破れぬ言葉を告げてとらせよう。ケクロプスの丘とキタイロンの谷の間に抱かれる土地がことごとく敵の手に陥るとき、はるかに見はるかしたもうゼウスはトリトゲネス（アテナ）がために木の砦をば、唯一不落の塁となし、なんじとなんじの子らを救うべく賜わるであろうぞ。またなんじは、陸路迫りくる騎兵の群れ、歩兵の大軍を安閑として待ってはならぬ。背をひるがえして退避せよ。やがてまた反撃に立ちむかうときもあろうぞ。おお聖なるサラミスよ、デメテルの賜物の蒔かれるとき、あるいはその穫入のときに、そなたは女らの子らを滅ぼすであろう」

【サラミスの戦いにあたって、バキスの神託】8,77

託宣というものが真実を告げるものではないとして、これに異を立てることは私にはできない。ことに次に記すような託宣の文句に注目するときには、実に明らさまに事実を告げている託宣に不信の念を抱くような気持ちにはなれぬのである。

「しかれども、彼らが狂気の望みに駆られて輝くアテナイを滅ぼし、黄金の太刀佩きたもうアルテミスの聖き浜辺と、海に沿うキュ

ノスラとをば船の橋にて繋ぐとき、尊き正義の女神は『傲慢』の子粗暴なる『飽満』が、ものみなを呑みつくさんと猛り狂うを鎮めたもうであろう。すなわち青銅は青銅とたがいに撃ちあい、軍神は血潮にて海を紅に染むべく、そのときこそは広きをみそなわすクロノスのお子と尊き勝利の女神が、ヘラスの国に自由の日をもたらしたもうぞ」

このようにバキスが実に明白に告げているのに対し、託宣に関してみずから異を唱える勇気はもとより私にはなく、また私としては他の人々にもそのような行為を容認することができぬのである。

【ペルシア敗北、遷都を進める言葉に対するキュロスの古い忠告が事実となる】9,122

「ゼウスは（民族としては）ペルシア人に、個人としてはキュロスさまあなたに、アステュアゲスを滅ぼして、（アジアの）覇権を与えようとのお志でありますから、この狭い荒地に住むわれらとしては、もっと良い土地に移り住もうではございませんか。わが国の近くにも遠くにも多くの土地がございますが、その一つでも手に入れれば、われらは現在よりもいっそう多くの点で、世の人間より嘆賞されることとなりましょう。支配者の位置にある民族がこのようなことをするのは当然であります。われらが多くの人間とアジア全土に君臨している今をおいて、さらに良い機会がはたしていつ到来しましょうや」

キュロスはそれを聞いて、その建言には別に驚かず、そうするがよかろうといったが、ただそのようにする場合には、自分たちがもはや支配者とはなれず他の支配をこうむることを覚悟しておけ、と注意した。柔らかい土地からは柔らかい人間が出るのは通例で、見事な作物と、戦争に強い男子とは、同じ土地から生じるわけにはゆかぬ、というのである、かくしてペルシア人たちは、自分たちの考えがキュロスに及ばなかったことを認めて、キュロスの前を引きさがり、平坦な土地を耕して他国に隷従するよりも、貧しい土地に住んで他を支配する道のほうを選んだのである。

トゥキュディデス『戦史』（松平千秋訳、岩波文庫）

【ペロポネソス戦争での最初の死者を弔うペリクレス】2,35-46

「われらの政体は他国の制度を追従するものではない。ひとの理想を追うのではなく、ひとをしてわが範に習わしめるものである。その名は、少数者の独占を排し多数者の公平を守ることを旨として、民主政治と呼ばれる。わが国においては、個人間に紛争が生ずれば、法律の定めによってすべての人に平等な発言がみとめられる。だが一個人が才能の秀でていることが世にわかれば、輪番制に立つ平等を排し世人のみとめるその人の能力に応じて、公に高い地位を授けられる。またたとえ貧窮に身を起こそうとも、国に益なす力をもつならば、貧しさゆえに道を閉ざされることはない。われらはあくまでも自由に公につくす道をもち、また日々にたがいに猜疑の目を恐れることなく自由な生活を享受している。よし隣人がおのれの楽しみを求めても、これを怒ったり、あるいは実害なしとはいえ不快を催すような冷視を浴びせることはしない。…

…われらはなんぴとにたいしても都を開放し、けっして異国の人々を逐い払ったことはなく、学問であれ見物であれ、知識を人に拒んだためしはない。敵に見られては損をする、という考えをわれらはもっていないのだ。なぜかと言えば、われらが力と頼むのは、戦いの仕掛けや虚構ではなく、事を成さんとするわれら自身の敢然たる意欲をおいてほかにないからである。

まとめて言えば、われらの国全体はギリシアが追うべき理想の顕現であり、われら一人一人の市民は、人生の広い諸活動に通暁し、自由人の品位を持し、おのれの知性の円熟を期することができると思う。そしてこれがたんなるこの場の高言ではなく、事実をふまえた真実である証拠は、かくのごとき人間の力によってわれらが築いた国の力が遺憾なく示している。…

われらを称えるホメロスはあらわれずともよい。言葉のあやで耳を奪うが、真実の光のもとに虚像を暴露するがごとき詩人の助けを求めずともよい。われらはおのれの果敢さによって、すべての海、すべての陸に道をうちひらき、地上のすみずみにいたるまで悲しみと喜びを永久にとどめる記念の塚を残している。…」

【ペリクレスへの非難に対して、民会での彼の演説】2,60

「私が予測していたとおり、諸君は私にたいして不満をつのらせてきたので（その原因は承知している）、民会に諸君の列席を求めた。諸君は私を難じ、悲惨な現状に屈しようとしているが、そのような態度に正当ないわれがあるかないか、その点について諸君の記憶を糺し、諸君の非を正したい。

…もとより、事なくして平和と幸福の道をえらべる立場にあれば、戦するほど愚かな考えはない。しかし、屈してただちに他国に隷属するか、危険を賭して勝利を得るか、この二者択一を余儀なくされたとき、危険を逃げるものはこれを耐えるものに劣る。この考えに私は終始一貫し、今日もこれを変える意志はない。しかし諸君は志操を屈した。諸君は戦火が及ぶまえは私の主張になびいたが、戦いに傷つけられると後悔しはじめた。

…諸君は、諸君全部の誇りであり喜びである覇者アテナイの栄誉を守らねばならぬ。戦いの苦しみから逃れるのをやめよ、さもなくば覇者の栄光を追うのをやめよ。…

…諸君、肝に銘じて忘れてはならぬ、われらが築いたこの国は、いかなる艱難にも屈せず、いかほどの人命を失い苦痛を負うとも不動なることによって世にならびない高名を馳せ、今日まで比類なき勢力をたくわえてきた。われらの国は、たとえいま万が一にもわれらが生者必滅の理に屈して、退くことがあろうとも、後世に不朽の碑をきざみ残す。

…諸君の義務は、現在耐えるべからざるを耐え忍べば、すなわちこれ青史に残る栄光たるべしと先見の明をひらき、ふたたび勇猛心をあらたにして、現在と未来をかちとることだ。ラケダイモンに使節を派遣するのをはやめるがよい。当面の苦境にあえぐがごとき気色を見せてはならぬ。災禍に襲われても自若として決意をひるがえさず、おのが行為によってこれを凌ぐものこそ、公私いずこにあっても最後の勝利者たりうることを、期して忘れてはならぬ」

【ピュロス攻防戦におけるデモステネスの激励】4,10

「今、生死をともに賭ける兵士諸君に告げる。かくのごとき必死の線上に立って、身辺を押しつつむ危険の一々を挙げ、賢明をよそおうものは、一人たりともあってはならぬ。いな、横も見ず、後ろも見ず、希望をかかげ盾をつらねて敵の懐中に突入し、それを越ゆるとき勝運をつかみうる、と思わねばならぬ。この危急にいたっては、右顧左眄はもってのほか、瞬時に決断にすべてを託すほかはない。

だが私の見るところ勝算はわがほうにある。…

私は諸君の冷静な自覚を求める。アテナイ人たる諸君は海を渡り敵地に上陸を強行して知っているはず、もし陸勢が潮騒や磯に乗り込む敵船の恐ろしさにたじろがず、一歩も退かじと刃むかうときは、けっして上陸を強行できるものではない。されば今、諸君自身陸勢となって踏みとどまり、水際から敵を撃退し、われらの生命とピュロスの砦をりっぱに守りぬいて見せるのだ」

【大戦の年数を告げる神託】5,26

ここに終わる大戦の経過年月は通算に十七年の長きに及んだ。…全体の期間を夏冬の順序で通算すれば、前記のごとく二十七年の年数をわずか数日上まわることがわかり、神託予言の類になんらかの信をおくとすれば、少なくともこの事実だけは、予言に正確に合致していることに気づくであろう。じじつ私自身、戦いが三・九、二十七カ年の日月を要するであろうと、開戦以来終わるときまでつねづね一般に言い広められていたのを記憶している。私はこの全期間を通じて、成年に達していたので分別もあり…

【アテナイとメロスの使節の会談】5,84-113

メロス側の出席者は答えて言った。

「冷静にたがいに意志を疎通させる、といえば正道に反するものではなく、したがって誹謗の余地はない。しかし、これから戦いが起こるかもしれぬという場合であればさこそあれ、戦いがすでに目下の現実であるこの場所でただいまの諸君の論は空虚としか思われぬ。じじつわれらの見うけるところ、諸君自身はあたかも裁判官としてこの会談の席にのぞむがごときであり、またこの会談の結

末は二者択一であることもまずはまちがいない。われらの主張が勝ち、ゆえにわれらがゆずらぬことになれば戦い、われらの論が破れれば隷属に甘んじるほかはないからだ」

アテナイ側「よろしい、もし諸君がメロスの浮沈を議するにさいして、未来の可能性を論拠にするとか、それに類する思惑だけを頼りに、現実を度外視し、目前の事実に目をふさぐ、という態度でここに集まっておられるなら、この議論を打ち切りたい。現実的解決を求めておられるなら、つづけてもよい」

メロス側、「かくのごとき立場に置かれた人間が、さまざまに言を練り想を構えることは当然の理でもあり、人情の恕すところと申したい。だがもとより、この会談はほかならずわれらの浮沈を議する席ゆえ、その会談の形式も、よろしければ、諸君が提案する形ですすめてもらいたい」

アテナイ側、「よろしい、もとよりわれらも言辞をかざって、ペルシアを破って得たわれらの支配権を正当化したり、侵されたがゆえに報復の兵をすすめるなどと言い張って、だれも信用しない話をながながとする気持は毛頭ない。また諸君も、ラケダイモンの植民地であるからわれらの陣営に加わらなかったとか、アテナイにたいしてはなんら危害を加えなかったとか、そう言ってわれらを説得できるなどと考えないでもらいたい。われら双方はおのおのの胸にある現実的なわきまえをもとに、可能な解決策をとるよう努力すべきだ。諸君も承知、われらも知っているように、この世で通ずる理屈によれば正義か否かは彼我の勢力伯仲のとき定めがつくもの。強者と弱者のあいだでは、強きがいかに大をなしえ、弱きがいかに小なる譲歩をもって脱しうるか、その可能性しか問題となりえないのだ」

メロス側、「しかし、われらの考えが及ぶかぎりでは、諸君にとっての利益とは（このさい損得など問題になるかどうか知らぬが、諸君が正邪を度外視し、得失の尺度をもって判断の基準とするというからには、われらもそのように議論をすすめねばならぬ）、とりもなおさず相身たがいの益を絶やさぬことではないか。つまり人が死地に陥ったときには、情状にうったえ正義にうったえることを許し、たとえその釈明が厳正な規尺に欠けるところがあろうとも、一分の理をみとめ見逃してやるべきではないか。しこうしてこれは諸君にとってはいっそう大なる益、諸君の没落はかならずや諸国あげての報復を招き、諸君が後世への見せしめにされる日もやがてはくることを思えば」

アテナイ側、「支配の座から落ちる日がくるものなら、きてもよい。われらはその終りを思い恐れるものではない。…さて今回やって来た目的は、われらの支配圏に益をはかり、かさねてこの会談に託して諸君の国を浮沈のきわから救うこと、この主旨の説明をつくしたい。われらの望みは労せずして諸君をわれらの支配下に置き、そして両国たがいに利益をわかちあう形で、諸君を救うことなのだ」

メロス側、「これは不審な。諸君がわれらの支配者となることの利はわかる、しかし諸君の奴隷となれば、われらもそれに比すべき利が得られるとでも言われるのか」

アテナイ側、「しかり、その理由は、諸君は最悪の事態に陥ることなくして従属の地位を得られるし、われらは諸君を殺戮から救えば、搾取できるからだ」

メロス側、「われらを敵ではなく味方と見なし、平和と中立を維持させる、という条件は受け入れてもらえないものであろうか」

アテナイ側、「諸君から憎悪を買っても、われらはさしたる痛痒を感じないが、逆に諸君からの好意がわれらの弱体を意味すると属領諸国に思われてはそれこそ迷惑、憎悪されてこそ、強力な支配者としての示しがつく」

メロス側、「とはいえ、諸君の属領諸国から見れば、諸君とはなんのつながりのないわれらの場合…」

【アルキビアデスの演説】6,15-18（城江良和訳）

遠征軍派遣を最も熱心に唱えたのは、クレイニアスの子アルキビアデスであった。…何よりも彼を駆り立てたのは、遠征軍の司令官となって、シケリアとカルケドンを奪い取りたいという欲望であり、遠征に成功して自らの富と名声を大きくしたいという願望であった。アルキビアデスは市民たちから大きな声望を得る地位にあったが、所有している資産を越える欲望に取り付かれ、馬の飼育な

どに財産を蕩尽していたのである。そしてこれこそが、後にアテナイ人の国家を崩壊に追いやる元凶になったのである。というのは、個人的な場面で彼が見せる異常なほどに自堕落の生活態度や、どんなことであれ彼が行動するときに必ず示す並はずれた知的能力を目の当たりにして、危惧を覚えた一般民衆は、彼に僭主の座への野心ありと考えて、敵に回ったのである。そして公職にあるときは戦争遂行に優れた手腕を発揮しながら、別の人物の手に国政を委ねた結果、ほどなくして国家を破滅させたのである。さてそのとき、アルキビアデスは進み出ると、アテナイ人に次のように勧告した。

「アテナイ人諸君、私は他の誰にもまして遠征軍の指揮をとるにふさわしい人間である。…私の若さと、自然の枠がはずれたかのような無分別についても、実のところそれがあればこそ、強大なペロポンネソス諸国を相手に、巧妙な言葉で会談に臨み、情熱によって信頼を勝ち得て、説得したのだ。だから今度も、そのことで心配しないでほしい。…遠征は決行すべきである。そうして、アテナイは現在の平穏に飽き足らず、シケリアにまで艦隊を進めたという評判が広まれば、ペロポンネソス諸国の戦意を挫くことができるだろう。そればかりか、あの島が吾々の勢力圏に加わったときには、吾々は間違いなく全ギリシアを支配下に収めることになるだろう。…諸君は、ニキアスの語った無為の勧めや、若者と老人を仲たがいさせようとする企みに、惑わされてはならない。…国家というものは、平穏に時を過ごしていると、すべてがそうであるように、それ自体で擦れ合って摩滅してしまい、あらゆる技能も老化してしまうが、しかし争いを続けていると、次々に新たな経験を獲得し、言葉ではなく行動によって自らを守る習慣を身につけるということも忘れてはならない。要するに、私の見るところでは、活動することしか知らない国家を崩壊させる最短の道は、活動を停止させることであり、最も安全な生活を送る国民とは、持ち前の習慣や伝統に欠陥があっても、それに最も忠実な政治をおこなう国民なのである。」

【月蝕により退却の機を失う】7,50

やがてその準備がととのい、今にも船出という瞬間になって、月蝕が起こった。たまたまこれは満月の夜であったからである。するとアテナイ勢の過半の兵士らはこれを気に病んで、指揮官たちに出航中止を要請し、またニキアス自身も（かれは神託予言などの類をやや偏重しすぎる性質であった）、予言者たちがこの兆しを解いて言っているように、二十七日間の日数が経過するまでは、その先いかなる行動をとるべきかについて協議することも慎みたい、と言った。そして月蝕のために遅疑をきたしたアテナイ勢は、なおも逗留を長びかせることとなってしまったのである。

【窮地に陥ったアテナイ】7,55

こうしてシュラクサイ勢が、今やその海軍によっても、堂々たる勝利をとげるに及んで（それまでは、シュラクサイ側はデモステネスが率いて来攻した船隊を恐れていたのであるが）、アテナイ側将士の落胆はおおうべくもなく、かれらの予想は大きく裏切られたが、しかしそのいずれにもまさって、この遠征挙行を後悔する気持がつよくかれらを捕えた。

　というのは、かれらがこれまでに兵をすすめた諸国の中で、ただこれらのシケリア諸邦のみが、アテナイと類似の体質を有する国々であったことによる。つまり、これらはアテナイと同じく民主政治の国家を営み、軍船、騎馬をはじめとする軍備もすこぶる大であるために、アテナイ側がこれを攻めるにさいしても、相手国の政体革新を餌に国内の反政府分子を武器として利用する、という常套手段をもちいておのが意にしたがわしめることもならず、さりとて圧倒的な兵力投入によってもことは成らなかった。それのみかほとんどすべての策は破れ、それ以前よりすでに窮していたところへ、さらに海戦においてさえ勝利を奪われるという、およそ予想だにしなかった事態が現実になるにいたって、アテナイ側の困窮たるや、もはやそれまでの比ではなくなったのである。

【シケリアからの退却を前に、将軍ニキアスの激励】7,77

「アテナイ人諸君、同盟国の諸君、現状がいかにあろうとも希望を失ってはならぬ（これにもまさる危険や悲惨にあいながら、りっぱに救われたものもいるのだ）、またいかに惨害があい重なったからとて、あるいはまた、当然勝者となるべき諸君に武運がつたな

かったからとて、過ぎておのれの失態を咎めることはやめよ。

私を見るがよい、…

最後に一つ、諸君の胆にきざんでおくこと、兵士諸君、諸君は是が非でも勇敢なる兵士の本分を発揮せねばならぬ瀬戸際にある。なぜなら、ここで意を屈すれば、落ちて一命を救われるべき行く先は近くにはない。しかし今敵の追撃を払い危険から脱出しうれば、各国の諸君はふたたびまみえんと渇望する故郷の地に達しえよう、またアテナイ人諸君は、祖国の偉大なる国力を、しばしの傾きからりっぱに立て直すことができよう。諸君、男児らこそ国をなすもの、人なき城壁や船が国ではない」